

中国語の語彙について  
——北京語との比較を中心に——

瀬戸口 勲

東京国際大学論叢 人文・社会学研究 第8号 抜刷  
2023年（令和5年）3月20日

中国語の語彙について  
——北京語との比較を中心に——

瀬戸口 勲

**On Chinese Vocabulary**  
**— Centering on Comparisons with Beijinese —**

SETOGUCHI, Isao

Abstract

At present, the Chinese we learn as a foreign language is Putonghua (Standard Chinese), which was first promulgated after the establishment of the People's Republic of China (1949) with the Pinyin Scheme (1958) and has since then been strongly promoted throughout China. That “vocabulary” plays an important role in foreign language education is a well-known fact, and this is certainly true in the case of Chinese. Some 600 or 700 words are taught in introductory and elementary classes, while some 1,500 words are considered necessary to converse relatively freely about everyday topics. A person needs to learn approximately 3,000 words to master the language. Changing times and social circumstances are intimately connected to the vocabulary of a language, as it can change considerably with the addition of neologisms, buzzwords, technical terms, scientific terms, and so forth. For example, with the end of the Cultural Revolution (1966-1976), Chinese society began a process of gradual change, and many new words were created alongside the economic development that accompanied post-1980 reform and opening-up policies. In this paper, I primarily limit the scope of inquiry to the two decades after 1980, organizing and analyzing the vocabulary that was established in Chinese society during that period and is still in use today. I clarify to what extent the common Beijinese words that were adopted in Putonghua remain in use to this day and discuss the future direction of Beijinese vocabulary.

*Keywords:* Chinese, Putonghua (Standard Chinese), Vocabulary, New words, Opening-up policies, Beijinese

## 目 次

1. はじめに
2. 中国語の語彙
  - 2.1 80年以降の語彙
  - 2.2 軽声問題
3. 「普通話」の中の北京語
4. おわりに

### 1. はじめに

「普通話」<sup>1)</sup>は、「①北京語の発音を標準音とし、②語彙は北方方言を基礎方言とし、③典型的な現代口語文の著作を文法の規範とする」(以北京语言为标准, 以北方话为基础方言, 以典范的现代白话文著作作为语法规范)と規定されている。<sup>2)</sup>

ここでは、定義②について着目をし、主に語彙の移り変わりを中心として取り上げたい。北方方言は北京語に代表されるが、その中には河北方言、東北方言、西北方言、西南方言、江淮方言等も含まれる。<sup>3)</sup>漢民族総人口の約70%が北方方言を使用し、その分布地域も、長江以北、長江以南、鎮江から九江までの長江沿岸地帯、四川、雲南、貴州三省の漢族地区、湖北、広西西北部、湖南西北部、広西西北部というように中国全土の広範囲を占めている。

1978年12月以降、当時の国家主席であった鄧小平は、政治は共産主義を維持しながら、経済は資本主義的な市場経済を導入した。深圳、珠海、厦門、汕頭といった経済特区を設置し、外資を積極的に受け入れることで、中国は急速な経済成長を遂げ、2010年にはGDP(国内総生産)が日本を抜いて世界第2位の経済大国となった。

このように、中国社会は経済重視へかじを切ったのである。経済特区設置による南方沿海部の経済発展に伴ない、中国の社会全体も大きく変化を始めた。「粵語北上」<sup>4)</sup>という社会現象が突如として湧き起こった。ちまたでは若者を中心として広東語を使用するのが流行の先端を切っているように映り、カラオケ店でも広東語の歌謡曲が流行した。

香港の中国返還前の世界経済都市・香港と近隣する広州におけるビジネスの勢いが強くなり、広東人の使用する語彙が北京やその他の地方都市にも流行り出したのである。このような社会変化が中国全土に浸透したのは、鄧小平が打ち出した「改革開放」政策の影響によるものである。“的士”、“打的”、“巴士”、“买单”などが人々の生活に溶け込み、政治の中心都市である北京でも“出租汽车”(タクシー)のことを“的士”、“坐出租汽车”“坐车”(タクシーに乗る)を“打的”(“打的士”のこと)、“公共汽车”(バス)を“巴士”、“结账”(勘定する)を“买单”という語や広東なまりの「普通話」が人々の暮らしに根付き、徐々に定着していった。

一方、1980年代になると、北京では日常的に使用されていた北京語の語彙が社会の変化とともに次第に人々の言語生活から遠ざかっていった。そこで、小論では、「普通話」の中の北京語の扱われ方についても検討を加えたい。

## 2. 中国語の語彙

### 2.1 80年以降の語彙

中国語の語彙は基本語彙と一般語彙に分けられる。基本語彙とは語の中心であり、単音節語から成っているものが圧倒的に多い。例えば、“天”、“地”、“水”、“風”、“雨”、“云”、“花”、“草”、“虫”、“魚”、“鳥”、“馬”、“牛”、“羊”、“走”、“回”、“听”、“说”、“念”、“写”、“吃”、“喝”、“来”、“去”、“有”、“话”、“大”、“小”、“好”、“坏”、“高”、“低”、“轻”、“重”、“很”、“都”、“和”、“再”、“太”、“更”、“不”、などがそれである。ところが単音節語だけでは意志の伝達が十分ではないため、現代中国語には複音節の語彙が増え続けているのが現状である。例えば、“桌子”、“椅子”、“爸爸”、“妈妈”、“美丽”、“干净”、“高兴”、“小说”、“杂志”、“学生”、“老师”、“工作”、“咖啡”、“玻璃”、“巧克力”、“冰淇淋”、“动物园”、“图书馆”、“俱乐部”、“现代化”、“自由主义”、というように、二音節語、三音節語、四音節語のものがあり、それらは日常生活に密接につながり、普段よく使用される欠くことのできない常用語である。基本語彙以外の語彙が一般語彙になる訳だが、その中には、新語、古語、外来語、方言、成語、慣用語、ことわざ、「歇後語」(しゃれ言葉)なども含まれる。

一般語彙の中のほとんどの語彙は複音節語であり、とりわけ二音節が多い。更に一般語彙の中の新語(流行語)の中には、その使用される期間が短いものも少なくない。それは語彙としての安定度を欠き、時間の経過とともに人々に忘れ去られたり、使用されなくなったり、死語となったためである。通常、一般語彙は基本語彙に比べて使用頻度が低いうえに、種類も多く、その数も膨大である。そのため、ある時期の語彙の中に社会生活のさまざまな側面が反映されていることは確かであり、同時にそれらの語彙を通して言語の背景にある社会状況や生活の変化等をうかがい知ることも可能と考えられる。

中国語の学習にあたっては、まず基本語彙から学び始めるのは当然のことである。その次によく使用される一般語彙の常用語へと学習を進めることになる。中国語をマスターするには常用語(基本語彙+一般語彙)の3,000語の習得が必須であるというのが定説となっている。<sup>5)</sup> 中国語の教材を編む場合、大学生や社会人にかかわらず、学習対象者がゼロから学ぶ入門・初級用のテキストは約600~700語が学べるように本文の構成を工夫する。それから学習を前へ進めるには約1,500語を習得できるように本文を設定するのが望ましいと言われている。<sup>6)</sup>

日本の高等学校では1980年代後半から1990年代にかけて、中学校・高等学校における選択科目の多様化が提案され、学習指導要領が改定されたこともあり、第二外国語として、「中国語」が導入された。<sup>7)</sup> 1997年には大学入試センター試験に「中国語」が加わったため、その後は、全国の高校において中国語導入校が増え続け、現在では第二外国語としての地位を強固なものにし、地域に即した積極的な中国語教育が展開されている。全国高等学校中国語教育研究会から出版された『高校中国語教育のめやす 平成11年度版』には、付録「言語材料：語彙編」として、718個の基本的な語彙が収録されており、それが大多数の高校教材のベースとなっている。<sup>8)</sup>

中国の社会環境も「改革開放」という政策転換の影響により著しい変化を遂げた。1980年代から今日に至るまで、その勢いはますます拍車がかかっている。当然のことながら語彙においても必然的に大きな変化が生じている。小論では1980年から2000年頃までの20年間を一つのくぎりとして範囲を限定する。特に新語(流行語)に焦点を当て、当時流行した語で、中国全土に広がりを見せた代表的な語彙を取り上げ、今日でも話し言葉として人々の言語生活に定着し続けている

代表的な語彙をいくつか紹介し、説明を加えたい。

#### A. 香港・広州から流行した語

- ①的士—“出租汽车”（タクシー）のことである。広東語“的士”から出発して“打的”（タクシーに乗る）“的哥”（男性ドライバー）“的妹”（女性ドライバー），“打面的”（小型レンタルマイクロバスに乗る）等の造語も派生している。
- ②打工仔—“佣工”（雇用労働者）のことである。“仔”は広東語では子供の意味であるが、ここでは若い男性を指している。男女を区別するために“打工妹”という言い方もある。“打工族”は地方からの集団で出稼ぎに来ているグループのことを指して言う。現在では、“打工”はアルバイトをするという意味であるが、『現代漢語詞典（第1版 1978年版）』には収録されていない。1983年に出版された第3版の同辞書にも未収録のままである。1980年代後半になると、「粵語北上」現象が中国の各地に起こり出し、多くの人々に受け入れられたと考えられる。『現代漢語詞典（増補本 2002年版）』には、“打工”は“做工”の意で臨時に仕事をするをいうと記されていることから、現在のような意味で定着したと考えられる。
- ③大哥大—携帯電話（ケイタイ）のことである。現在では、“手机”が一般的だが、“便携式电话”、“手携式电话”などの言い方もある。台湾では“携帯電話”、“移动电话”などもよく使用されている。
- ④民工潮—“盲流”（農村から大都市へ働き口を求めて多数の人々が移動すること）のことである。“民工”とは農村から都会に出て来て肉体労働をしている人々を言う。改革開放政策の初期に広東省沿海部の都市から動き出したと言われる。その後、上海、北京へと広がり、全国の多くの都市で、これらの「農民工」（出稼ぎ農民）の増加による都市建設が始まった。
- ⑤炒鱿鱼—首にすることを言う。「イカを炒める」という意味であり、もともと広東人・香港人がよく使用する表現である。炒めたイカの丸まった状態が、布団で荷物をくるんで家出する姿に似ていることから使用されるようになったというのが民間では伝わっている。
- ⑥埋单—広東語である。「普通話」では“结账”（勘定する、会計をすませる）の意味であり、飲食店や娯楽の場所で使われる。“买单”とも書く。北方語地域では“埋单”よりも、“买单”が多く使用されている。今では香港や広州一部地域だけでなく、北京など大都市の高級レストランや小さい路地の食堂などでも“结账”よりも“买单”の方が一般的である。<sup>9)</sup>

#### B. 経済的な影響を受け流行した語

- ⑦～城—“城”はもともと規模の大きい商店のことを指していたが、当時は規模の大小にかかわらず、よく使用された。また、一つの商店だけでなく、同種の品物を集中的に販売する通り等にも用いられた。街の至る所に目につく語は、〈家具城〉、〈书城〉、〈电器城〉、〈电脑城〉、〈饮食城〉、〈音乐城〉、〈电影城〉などである。
- ⑧～热—“热”は人気があると歓迎されるという意味で、日本語の使用法とほぼ共通している。〈足球热〉、〈健身热〉、〈出日热〉、〈外语热〉、〈旅游热〉、〈收藏热〉、〈招牌热（ブランドブーム）〉、〈流行歌曲热等〉などが一般的によく使われる語である。
- ⑨～文化—“文化”は現代中国語では「教養」「学問」という意味があるが、当時は日本語の使われ方に近い意味で多用されている。〈酒文化〉、〈茶文化〉、〈饮食文化〉、〈食文化〉、〈服装文化〉、〈消费文化〉、〈周末文化〉、〈钱文化〉などが目立っている。

- ⑩～工程—「工程」はプロジェクトの意味である。中国各地で建設ラッシュだった頃、人々の目につく＜爱心工程＞、＜希望工程＞、＜幸福工程＞、＜安居工程＞、＜康居工程＞、＜名牌工程＞、＜明星工程＞、＜饮水工程＞、＜再就业工程＞、＜夕阳工程＞などの広告が溢れていた。また当時、＜豆腐渣工程＞という語が話題となった。＜豆腐渣＞とは「おから」の意味で、こわれやすい建築物のことである。同じような用法に＜胡子工程＞（ひげのようにだらだらと長引き工事で不完全な建物を建造すること）がある。
- ⑪～花园—もともと「花園」という意味だが、それが別荘や豪華な建物を指すようになり、高級マンションのイメージを強調する名称として使われた。本来邸宅を意味する「マンション」が日本の高級アパートの代名詞として使用されたのによく似ていると言われる。当時、高層住宅販売の広告に多く掲載された。＜海印花园＞、＜恬景花园＞などがある。
- ⑫“改革开放”—1978年以降、中国で最も流行した用語である。「改革开放」以前の常用語は「革命」であったが、それが“改革开放”にとって代わられたのである。このスローガンは中国経済と政治体制を改革して、生産力を高め、外国との経済・技術の交流を促進させることで、社会の現代化を実現させるのが最大の目標であった。<sup>10)</sup>

上記の他、1980年代から今日に至るまで中国社会の中で定着している語も数多い。使用頻度の高いものには、“下海”（天下り、公務員の転職のこと）“宰”（ぼったくる、不正な手段で利益を得ること）、そこから“宰人”“宰客”の派生語も現われ、ある種の社会問題にも発展した。“小皇帝”（一人っ子政策により、両親、父母の寵愛を受けてわがままに育った子供のこと）。“卡拉OK”（日本のカラオケを音訳したものであり、1990年の初め頃から大都市のみならず地方都市に至るまで中国全土においてまたたく間に広まった），“AA制”（割り勘のことで、若者の間でよく使われる）などがある。

更に、“网络”（ネットワーク），“网民”（ネットユーザー），“网页”（ホームページ）“网友”（メル友），“网址”（メールアドレス），“网站”（ウェブサイト），“网吧”（ネットカフェ）等の語がパソコンの普及拡大とともに定着し、今後もそれらの関連用語の増加が見込まれる。

## 2.2 轻声問題

「普通話」が北京語の音韻体系、北方語の語彙を基礎とすることになっていることから、北京語の特徴である「轻声」は単なる変調現象だけでなく、語彙語法とも密接な関係を有している。

轻声について『中国語学習ハンドブック』（改訂版、2010年）には、以下のように説明されている。「単語或いは文の中ではその固有の声調を失い、軽く短く発音される場合がある。この現象を轻声という。」と記されている。

「声調言語」と言われる中国語は、それぞれの音節に固定した調値（音の高さ）を有している。轻声の調値は、前に来る音節の声調によって決定されるが、具体的には五度制<sup>11)</sup>を採用すると、第1声の後では「2」、第2声の後では「3」、第3声の後では「4」、第4声の後では「1」である。つまり、第3声の後の調値が最も高く、第4声の後では一番低い。また、轻声は政治、文化、科学などの書面語にはなく、日常的な常用語彙に現れ、通常、複音節語、特に二音節語の後の音節に現れることが多い。しかし一音節語で例えば、①語気助詞（啊、呀、哪、呢、了、吗、啦）②構造助詞（的、地、得）、③量詞（个）、④アスペクト助詞（了、着、过）などは轻声で読まれる。

小論では、轻声に関する先行研究として、下記の2本の論文を取り上げる。

1. 『普通話の軽声について——北京語との比較を中心に——』大東文化大学紀要人文科学 第16号 昭和53年(1978年)3月
2. 辻田正雄『軽声について』仏教大学文学部論集 第88号 2004年3月

瀬戸口(1978)では、202語の北京語語彙の中で71語が非軽声(本来の声調)に変化していることから、「普通話」が軽声の面で、「非北京語化」に進んでいることの現れであり、今後も時代の変化とともに「軽声」が減少するのではないかとしている。その主な原因として、言語の簡素化を推進する一つの方向なのか、軽声現象のない南方方言の影響なのかについては、現時点では不明であると結論付けている。

辻田(2004)では、1990年代に入り、現代中国語教育において今まで以上に教材や参考書、研究書の中に「軽声」が取り上げられるといった社会背景の中で、軽声の扱いが規範的な辞書によって不統一である点に着目して、軽声の規範の問題を中心に、単語の軽声詞について軽声の変化及び規範的な辞書と現実の口語音の相違を含めた論考である。論文の構成は、1. 問題の所在、2. 軽声の規範、3. 上声+軽声、4. 軽声の変化、5. 軽声去化、6. 結語となっている。3. 上声+軽声の項目の中で北京語と満州語の軽声についての関わりを指摘している点はとても興味深い。詳細な研究には更なる検討、説明が待たれる。

上記の先行研究をベースとしているものの、今回はテーマを北京語の語彙面での比較を中心に考察することから、先に挙げた瀬戸口(1978)公刊から20余年の歳月が経過した今日、『現代漢語詞典』(第7版 2016年版)では前述の71語を除く軽声詞がどのように扱われているかについて検討する。

そこで、『現代漢語詞典』(第1版 1978年版)で軽声として扱われていた語、(1)“麻烦”，(2)“事情”，(3)“地方”，(4)“意思”，(5)“头发”，(6)“规矩”，(7)“衣服”，(8)“耳朵”，(9)“豆腐”，(10)“萝卜”，(11)“情形”，(12)“伙计”，(13)“称呼”，(14)“巴掌”，(15)“故事”，(16)“朋友”，(17)“比方”，(18)“毛病”，(19)“琵琶”，(20)“便宜”，(21)“棉花”，(22)“明白”，(23)“屁股”，(24)“盘缠”，(25)“脾气”，(26)“茉莉”，(27)“玫瑰”，(28)“迷糊”，(29)“福气”，(30)“点心”，(31)“风筝”，(32)“暖和”，(33)“吩咐”，(34)“出息”，(35)“知道”，(36)“脑袋”，(37)“贴补”，(38)“握布”，(39)“芝麻”，(40)“邈邈”，(41)“先生”，(42)“结实”，(43)“喜欢”，(44)“休息”，(45)“学问”，(46)“荒唐”，(47)“笑话”，(48)“合同”，(49)“招呼”，(50)“俏皮”，(51)“粮食”，(52)“相声”，(53)“和尚”，(54)“伙计”，(55)“葫芦”，(56)“行市”，(57)“功夫”，(58)“养话”，(59)“骆驼”，(60)“见识”，(61)“狐狸”，(62)“力量”，(63)“家伙”，(64)“含糊”，(65)“柴火”，(66)“力气”，(67)“快活”，(68)“喇叭”，(69)“月亮”，(70)“窟窿”，(71)“考究”，(72)“财主”，(73)“紇瘩”，(74)“喇嘛”，(75)“巴结”，(76)“抽屉”，(77)“闺女”，(78)“消息”，(79)“苍蝇”，(80)“帮手”，(81)“漂亮”，(82)“差使”，(83)“报酬”，(84)“棒槌”，(85)“补丁”，(86)“部分”，(87)“出落”，(88)“便当”，(89)“扁食”，(90)“商量”，(91)“窗户”，(92)“时候”，(93)“舒服”，(94)“收拾”，(95)“事情”，(96)“烧饼”，(97)“出息”，(98)“眼睛”，(99)“簸箕”，(100)“认识”，(101)“凑合”，(102)“将就”，(103)“能耐”，(104)“蘑菇”，(105)“姑娘”，(106)“叨唠”，(107)“轱辘”，(108)“铃铛”，(109)“长虫”，(110)“畜生”，(111)“大夫”，(112)“折腾”，(113)“热和”，(114)“关系”，(115)“利害”，(116)“软和”，(117)“行李”，(118)“小气”，(119)“薪水”，(120)“小姐”，以上の軽声詞について、『現代漢語詞典』(第7版 2016年版)と比較検討した結果、次のようにまとめることができる。

- (イ) 軽声から非軽声に変化したものが(37)“貼补”と(120)“小姐”の2語である。
- (ロ) 口語に変化しているものが,(77)“闺女”,(103)“能耐”,(105)“姑娘”,(106)“叨唠”,(107)“轱辘”,(109)“长虫”,(111)“大夫”,(116)“软和”の8語である。
- (ハ) 軽声・非軽声のどちらでも可というのが,(18)“毛病”,(26)“茉莉”,(33)“吩咐”,(38)“撮布”,(46)“荒唐”,(48)“合同”,(62)“力量”の7語である。
- (ニ) 北京語方言として残っているものは,(89)“扁食”(ギョウザ・ワンタン)の1語のみである。
- (ホ) (119)“薪水”は収録されていない。“薪水”(給料)は現代社会ではなじまず死語に近い。つまり、『現代漢語詞典(第1版 1978年版)』では約3分の1が非軽声に変化したか、残りの軽声についてはその後も大部分が軽声のまま採用されている。この検討結果については、以下の2点に整理される。

- ① 常用されている北京語は『現代漢語詞典(第1版 1978年版)』では大幅に削除されたものの、日常生活の場面、特に口語としては、時間が経過した後でも人々に使用され続けている。
- ② 軽声には品詞や意味を区別する働きがある。数量的には決して多いとは言えないが、軽声の存在はひとつの変調現象として正確に把握する必要がある。

香坂順一氏の『中国語軽声辞典』は、張洵如氏の『北京話轻声词汇』を基に約4,000語を収録した辞書である。軽声について、香坂氏は、書中で軽声にするか非軽声にするかの取捨の基準が不明であると指摘している。<sup>12)</sup>

“太阳”のように、第1版では軽声が非軽声に変わり、それが第7版では軽声でも非軽声でもよいというような表記になっている語がある。“玻璃”のように『現代漢語詞典(第1版 1978年版)』及び『現代漢語詞典(増補本 2002年版)』では軽声でも非軽声でも可となっているが、最新の『現代漢語詞典(第7版 2016年版)』では軽声表記になっているような語も見受けられる。しかし、その変化の根拠についてはいまだ不明のままである。

「語彙」は多くの人に受け入れられると、それがそのまま定着するという側面があるものの、やはりこの種の不明な点については、放置するのではなく、今後、解明すべく研究に取り組みたい。

### 3. 普通話の中の北京語

ここでは、宋孝才・马欣华の両氏が編んだ『北京話語词汇释』より、北京地区において、日常生活の中で使用頻度の高いとされている139語を抽出し、それが『現代漢語詞典』でどのように扱われているかを調査する。時代の推移と社会の変化とともに収録されている北京語について、1980年代から約30余年の間にどのような変化過程をたどっているかに着目し、その実態を明らかにしたい。

以下の表は、『現代漢語詞典(第1版 1978年版)』、『現代漢語詞典(増補本 第4版 2002年版)』、『現代漢語詞典(第7版 2016年版)』の3種を資料として、筆者が作表したものである。(○印は採用、×は不採用を示す)

	北京語	〔A〕 現代漢語詞典	〔B〕 現代漢語詞典	〔C〕 現代漢語詞典
		第1版 (1978年)	増補本 (2002年)	第7版 (2016年)
1	没辙	<口> ○	○	<口> ○
2	泡汤	<方> ○	○	<口>【動】 ○
3	赶明儿	×	○	<口>【副】 ○
4	甬	<方> ○	<方> ○	<方> ○
5	成天	<口> ○	○	<口>【副】 ○
6	昨儿 (个)	<口> ○	<方> ○	<口>【名】 ○
7	今儿 (个)	<方> ○	<方> ○	<口>【名】 ○
8	前儿 (个)	<口> ○	○	<口>【名】 ○
9	敢情	<方> ○	<方> ○	<方>【副】 ○
10	多咱	<方> ○	<方> ○	<方>【代】 ○
11	内脸儿	<方> ○	<方> ○	<方>【名】 ○
12	脑瓜儿	○	○	<口>【名】 ○
13	坐蜡	<方> ○	<方> ○	<方>【動】 ○
14	德行	<方> ○	<方> ○	<口>【名】 ○
15	几儿	<口> ○	○	<口>【代】 ○
16	瞅	<方> ○	<方> ○	<方>【動】 ○
17	真格的	<方> ○	<方> ○	<口> ○

18	老家儿	<方> ○	<方> ○	<口> ○
19	滋润	<方> ○	<方> ○	<方> ○
20	公母俩	<方> ○	<方> ○	<方>【名】 ○
21	讪脸	<方> ○	<方> ○	<方>【動】 ○
22	就手儿	○	○	【副】 ○
23	唾摸	<方> ○	<方> ○	<方>【動】 ○
24	包圆儿	<口> ○	○	<口>【動】 ○
25	边式	<方> ○	<方> ○	<方>【形】 ○
26	档子	<方> ○	<方> ○	【名】 ○
27	搭档	<方> ○	<方> ○	【名】【動】 ○
28	打马虎眼	<方> ○	<方> ○	<口> ○
29	八下里	<方> ○	<方> ○	<方>【名】 ○
30	把家	<方> ○	<方> ○	<方>【動】 ○
31	白不毗列	<方> ○	<方> ○	<方> ○
32	擦黑儿	<方> ○	<方> ○	<方>【動】 ○
33	摆谱儿	<方> ○	<方> ○	<方>【動】 ○
34	般配	<方> ○	○	【形】 ○
35	半晌	<方> ○	<方> ○	【数量詞】 ○
36	前半晌(儿)	<方> ○	<方> ○	<方>【名】 ○

37	响觉	<方> ○	<方> ○	<方>【名】 ○
38	棒子	<方> ○	<方> ○	<方> ○
39	保不齐	<方> ○	<方> ○	<方>【副】 ○
40	编派	<方> ○	<方> ○	<方>【動】 ○
41	不起眼(儿)	<方> ○	<方> ○	×
42	藏闷儿	<方> ○	<方> ○	<方> ○
43	趁钱	<方> ○	<方> ○	<方>【動】 ○
44	瞅见	<方> ○	<方> ○	<方>【動】 ○
45	出溜	<方> ○	<方> ○	<方>【動】 ○
46	刺儿头	<方> ○	<方> ○	<方>【名】 ○
47	锉	<方> ○	<方> ○	<方>【形】 ○
48	搭帮	<方> ○	<方> ○	<方>【動】 ○
49	打挺儿	<方> ○	○	<口>【動】 ○
50	打头	<方> ○	<方> ○	<方>【副】 ○
51	大发	<方> ○	<方> ○	<方>【形】 ○
52	大概齐	<方> ○	<方> ○	<方> ○
53	大面儿	<方> ○	<方> ○	<方>【名】 ○
54	当间儿	<口> ○	<方> ○	<口>【名】 ○
55	当家的	<口> ○	<方> ○	<口>【名】 ○

56	刀螂	<方> ○	<方> ○	<方>【名】 ○
57	倒牙	<方> ○	<方> ○	<方>【動】 ○
58	到了儿	<方> ○	<方> ○	<方>【副】 ○
59	道道儿	<方> ○	<方> ○	<口>【名】 ○
60	抵事	<方> ○	○	<方>【形】 ○
61	点子	<方> ○	○	<方> ○
62	垫背	<方> ○	<方> ○	<方>【動】 ○
63	丁点儿	<方> ○	<方> ○	<方>【量詞】 ○
64	懂行	<方> ○	○	<口>【形】 ○
65	二把刀	<方> ○	<方> ○	<口>【形】【名】 ○
66	二五眼	<方> ○	<方> ○	<方>【形】【名】 ○
67	浮头儿	<方> ○	<方> ○	<方>【名】 ○
68	富态	<方> ○	○	<口>【形】 ○
69	高低	<方> ○	<方> ○	<方>【副】 ○
70	够呛	<方> ○	<方> ○	<口>【形】 ○
71	咕容	<方> ○	×	×
72	挂	<方> ○	○	【動】 ○
73	归齐	<方> ○	<方> ○	<方>【副】 ○
74	哈喇子	<方> ○	<方> ○	<方>【名】 ○

75	殢	<方> ○	<方> ○	<方> 【形】 ○
76	号丧	<方> ○	○	【動】 ○
77	糊弄	<方> ○	<方> ○	【動】 ○
78	欢实	<方> ○	<方> ○	【形】 ○
79	慌神儿	<方> ○	○	<口> 【動】 ○
80	挤对	<方> ○	<方> ○	<方> 【動】 ○
81	挤咕	<方> ○	<方> ○	<方> 【動】 ○
82	矫情	<方> ○	<方> ○	<口> 【形】 ○
83	较真(儿)	<方> ○	<方> ○	【形】 ○
84	可身(儿)	<方> ○	<方> ○	【形】 ○
85	剋架	<方> ○	<方> ○	【動】 ○
86	抠门儿	<方> ○	<方> ○	【形】 ○
87	攤	<方> ○	<方> ○	<方> 【動】 ○
88	来劲儿	<方> ○	○	<口> 【形】 ○
89	冷孤丁	<方> ○	×	×
90	愣头儿青	<方> ○	<方> ○	<方> 【名】 ○
91	瞭	<方> ○	<方> ○	【動】 ○
92	溜号(儿)	<方> ○	<方> ○	<方> 【動】 ○
93	喽	<方> ○	<方> ○	<方> 【動】 ○

94	露怯	<方> ○	<方> ○	<方> 【動】 ○
95	乱套	<方> ○	<方> ○	<方> 【動】 ○
96	忙活	<方> ○	○	【動】【名】 ○
97	毛估	<方> ○	<方> ○	<方> 【形】 ○
98	没门儿	<方> ○	<方> ○	<方> 【動】 ○
99	没谱儿	<方> ○	○	<口> 【動】 ○
100	脑壳	<方> ○	<方> ○	<方> 【名】 ○
101	脑门子	<方> ○	○	<口> 【名】 ○
102	恁	<方> ○	<方> ○	<方> 【代】 ○
103	骗腿儿	<方> ○	○	<方> 【動】 ○
104	起急	<方> ○	<方> ○	<方> 【動】 ○
105	起开	<方> ○	<方> ○	<方> 【動】 ○
106	气不忿儿	<方> ○	<方> ○	<方> ○
107	悄没声儿	<方> ○	○	<方> 【形】 ○
108	姥姥	<方> ○	<方> ○	<方> 【名】 ○
109	身板(儿)	<方> ○	○	<方> 【名】 ○
110	身子骨儿	<方> ○	<方> ○	<口> 【名】 ○
111	神	<方> ○	<方> ○	<方> 【形】 ○
112	生法	<方> ○	<方> ○	×

113	是个儿	<口>	○		○	<口> 【動】	○
114	瘦溜	<方>	○	<方>	○	<方> 【形】	○
115	耍贫嘴	<方>	○		○	<方> 【形】	○
116	顺溜	<方>	○	<方>	○	<口> 【形】	○
117	说道	<方>	○	<方>	○		×
118	说话	<方>	○	<方>	○		○
119	死气自来的	<方>	○	<方>	○	<方> 【形】	○
120	酸不溜去(的)	<方>	○	<方>	○	<方> 【形】	○
121	淘	<方>	○	<方>	○	<方> 【形】	○
122	挑眼(儿)	<方>	○	<方>	○	<方> 【動】	○
123	忒	<方>	○	<方>	○	<方> 【副】	○
124	细高挑儿	<方>	○	<方>	○	<方> 【名】	○
125	瞎謔	<方>	○	<方>	○	<方> 【動】	○
126	显摆	<方>	○	<方>	○	<方> 【動】	○
127	随	<方>	○	<方>	○	<方> 【動】	○
128	小瞧	<方>	○	<方>	○	<方> 【動】	○
129	砑内儿	<方>	○	<方>	○	<方> 【形】	○
130	兴许	<方>	○		○	【副】	○
131	悬	<方>	○		○	<方> 【形】	○

132	悬手	<方>	○	<方>	○	<方>【形】	○
133	严实	<方>	○	<方>	○	<口>【形】	○
134	眼神(儿)	<方>	○	<方>	○	<方>【名】	○
135	冤	<方>	○	<方>	○	<方>【動】	○
136	砸锅	<方>	○	<方>	○	<口>【動】	○
137	糟践	<方>	○	<方>	○	【動】	○
138	滋	<方>	○	<方>	○	<方>【動】	○
139	自各儿	<方>	○	<方>	○	<方>【代】	○

※表内の<方>は方言, <口>は口語のことである。<方>や<口>が記録されていないのは、「普通話」であることを意味している。<sup>13)</sup>

上記の作業結果から次のように整理することができる。

- 北京語の語彙が〔A〕『現代漢語詞典（第1版 1978年版）』（以下,〔A〕とする),〔B〕『現代漢語詞典（増補本 2002年版）』（以下,〔B〕とする),〔C〕『現代漢語詞典（第7版 2016年版）』（以下,〔C〕とする）の中で,そのまま北京語語彙として残っているものが139語中, 4. “甬”, 9. “敢情”, 10. “多咱”, 11. “门脸儿”, 13. “坐蜡”, 16. “瞅”, 19. “滋润”, 20. “公母俩”, 21. “讪脸”, 23. “咂摸”, 25. “边式”, 29. “八下里”, 30. “把家”, 31. “白不吡咧”, 32. “擦黑儿”, 33. “摆谱儿”, 36. “前半晌(儿)”, 37. “晌觉”, 38. “棒子”, 39. “保不齐”, 40. “编派”, 42. “藏闷儿”, 43. “趁钱”, 44. “瞅见”, 45. “出溜”, 46. “刺儿头”, 47. “铿”, 48. “搭帮”, 50. “打头”, 51. “大发”, 52. “大概齐”, 53. “大面儿”, 56. “刀螂”, 57. “倒牙”, 58. “到了儿”, 62. “垫背”, 63. “丁点儿”, 66. “二五眼”, 67. “浮头儿”, 69. “高低”, 73. “归齐”, 74. “哈喇子”, 75. “顽”, 80. “挤对”, 81. “挤咕”, 87. “攥”, 90. “愣头儿青”, 92. “溜号(儿)”, 93. “喽”, 94. “露怯”, 95. “乱套”, 97. “毛估”, 98. “没门儿”, 100. “脑壳”, 102. “恁”, 103. “骗腿儿”, 104. “起急”, 105. “起开”, 106. “气不忿儿”, 107. “悄没声儿”, 108. “姥姥”, 109. “身板(儿)”, 111. “神”, 114. “瘦溜”, 119. “死气自来的”, 120. “酸不溜去(的)”, 121. “淘”, 122. “挑眼(儿)”, 123. “忒”, 124. “细高挑儿”, 125. “瞎谗”, 126. “显摆”, 127. “随”, 128. “小瞧”, 129. “研门儿”, 132. “悬手”, 134. “眼神(儿)”, 135. “冤”, 138. “滋”, 139. “自各儿”など80語あり, 全体の過半数を占めている。
- 〔B〕で「普通話」に移動した語が139語中, 1. “没辙”, 2. “泡汤”, 5. “成天”, 8. “前儿(个)”, 12. “脑瓜儿”, 15. “几儿”, 22. “就手儿”, 24. “包圆儿”, 34. “般配”, 49. “打挺儿”, 60. “抵事”, 61. “点子”, 64. “懂行”, 68. “富态”, 72. “挂”, 76. “号丧”, 79. “慌神儿”, 88. “来劲儿”, 96. “忙活”, 99. “没谱儿”, 101. “脑门子”, 103. “骗腿儿”, 107. “悄没声儿”, 109. “身板(儿)”,

113. “是个儿”, 115. “耍贫嘴”, 130. “兴许”, 131. “悬” など28語ある。
3. [B] および [C] で「普通話」に収録された語(口語を含む)は, 1. “没辙”, 2. “泡汤”, 3. “赶明儿”, 5. “成天”, 8. “前儿(个)”, 12. “脑瓜儿”, 15. “几儿”, 22. “就手儿”, 24. “包圆儿”, 34. “般配”, 49. “打挺儿”, 64. “懂行”, 68. “富态”, 72. “挂”, 76. “号丧”, 79. “慌神儿”, 88. “来劲儿”, 96. “忙活”, 99. “没谱儿”, 101. “脑门子”, 113. “是个儿”, 130. “兴许” など22語である。
4. 上記の [C] で採用されていない語彙は, 41. “不起眼儿”, 71. “咕容”, 89. “冷孤丁”, 112. “生法”, 117. “说道” の5語のみである。その中の71. “咕容” と89. “冷孤丁” は, [B] でも採用されていない。
5. 北京語の3. “赶明儿” は [A] では採用されていないが, [B], [C] には「普通話」に組み入れられている。
6. その他
- (1) [B] では方言, [C] では「普通話(口語を含む)」とされているものは, 「普通話」(口語を含む)は, 6. “昨儿(个)”, 7. “今儿(个)”, 14. “德行”, 17. “真格的”, 18. “老家儿”, 26. “档子”, 27. “搭档”, 28. “打马虎眼”, 35. “半晌”, 55. “当家的”, 59. “道道儿”, 70. “够呛”, 77. “糊弄”, 78. “欢实”, 82. “矫情”, 83. “较真(儿)”, 84. “可身(儿)”, 85. “剋架”, 86. “抠门儿”, 91. “瞭”, 110. “身子骨儿”, 116. “顺溜”, 118. “说话”, 133. “严实”, 136. “砸锅”, 137. “糟践” など計26語である。
- (2) [A] で方言, [B] で「普通話」とされるが, [C] では方言に移動しているのは, 61. “点子”, 103. “骗腿儿”, 107. “悄没声儿”, 109. “身板(儿)”, 115. “耍贫嘴”, 131. “悬” など計6語である。
- (3) [A] [B] では方言とされるが, [C] では口語に移動しているのは, 7. “今儿(个)”, 14. “德行”, 17. “真格的”, 18. “老家儿”, 28. “打马虎眼”, 59. “道道儿”, 65. “二把刀”, 70. “够呛”, 88. “矫情”, 110. “身子骨儿”, 116. “顺溜”, 133. “严实”, 136. “砸锅” など計13語である。
- (4) [A] では口語, [B] では普通話とされるが, [C] では口語として扱われているのは, 1. “没辙”, 5. “成天”, 6. “昨儿(个)”, 8. “前儿(个)”, 15. “几儿”, 24. “包圆儿”, 113. “是个儿” など7語である。
- (5) [A] では口語, [B] では方言, [C] では口語として扱われているのは, 54. “当间儿”, 55. “当家的” の2語である。
- (6) [B] および [C] で採用されていないのは, 71. “咕容”, 89. “冷孤丁” など2語である。

結果として, 139語の北京語の語彙は, 『現代漢語詞典(第1版 1978年版)』では“赶明儿”の1語を除くほぼ全てが収録されている。『現代漢語詞典(増補本 2002年版)』, 『現代漢語詞典(第7版 2016年度)』と版を重ねるたびに北京語語彙が少しずつ減少傾向に向かっていることは, 容易に想像されるが, 今回の調査で, 139個中, 1. “没辙”, 2. “泡汤”, 3. “赶明儿”, 5. “成天”, 6. “昨儿(个)”, 7. “今儿(个)”, 8. “前儿(个)”, 12. “脑瓜儿”, 14. “德行”, 15. “几儿”, 17. “真格的”, 18. “老家儿”, 22. “就手儿”, 24. “包圆儿”, 26. “档子”, 27. “搭档”, 28. “打马虎眼”, 34. “般配”, 35. “半晌”, 49. “打挺儿”, 54. “当间儿”, 55. “当家的”, 59. “道道儿”, 64. “懂行”, 65. “二把刀”, 68. “富态”, 70. “够呛”, 72. “挂”, 76. “号丧”, 77. “糊弄”, 78. “欢实”, 79. “慌神儿”, 82. “矫情”, 83. “较真(儿)”, 84. “可身(儿)”, 85. “剋架”, 86. “抠门儿”, 88. “来劲儿”, 91. “瞭”, 96. “忙活”, 99. “没谱儿”, 101. “脑门子”, 110. “身子骨儿”, 113. “是个儿”, 116. “顺溜”, 118. “说话”, 130. “兴许”, 133. “严实”, 137. “糟践” など49個の語が「普通話」(口語を含む)へ移動していることが分かった。また, [B] では方言語彙として扱われていた語が [C] では, 6. “昨儿(个)”, 7. “今

儿(个)”, 14. “德行”, 17. “真格的”, 18. “老家儿”, 28. “打马虎眼”, 54. “当间儿”, 55. “当家的”, 59. “道道儿”, 65. “二把刀”, 70. “够呛”, 82. “矫情”, 110. “身子骨儿”, 116. “顺溜”, 133. “严实”, 136. “砸锅”など16語が口語として「普通話」の中に含まれ、方言とは明らかに区別して採用されていることが分かった。

このことから、時間の経過と社会の変化という状況下において、北方方言の語彙を基礎に作られた「普通話」の語彙は、北方方言の代表言語である北京語を一定程度残し、その他の漢語の方言語彙を一部取り入れながら、暮らしの中に密着した言語へと広がっていくものと判断される。

#### 4. おわりに

今回は中国の1980年以降、主に「改革開放政策」による社会状況の著しい変化とともに生まれた語彙について、現在においても人々の生活に定着している代表的な語彙を取り上げて整理分析した。

また「普通話」は北方方言を基礎方言とすると定められており、その語彙も北方方言（代表言語：北京語）を規範としているが、「普通話」の中で北京語がどのように扱われているかについても図表化して比較対照を試みた。それに基づいて検討した結果、「北京語」が「普通話」の中で口語として多数採用されていることが明らかになった。また、軽声問題について、時代の経過とともに軽声が本調通りに読まれ、「非北京語化」の方向に進むのではないかという先行研究の瀬戸口(1978)の指摘については、今回の作業からは特出できる結論は得られなかった。辻田(2004)でも指摘されているように、「軽声」の規範問題や減少傾向については、いまだ解明されていない点もあるので、今後も引き続き検討を加えたい。

『現代漢語詞典(第7版 2016年版)』の中で<方><口>として取り上げられている語彙には北京語が多くを占めていることは明白であるが、それらの中には上海語、広東語、福建語の影響を受けている語彙も含まれている可能性が極めて高い。

今後は上記の点を注視しながら、現地調査を実施し、『現代漢語詞典』の中で採用されている「普通話」の口語について、更に深く探求したい。併せて中国語の語彙の移り変わりについても、言語の現象面だけでなく、「語史」の視点からも研究を進めたい。

#### 注

- 1) 現代中国語の共通語を指す。漢民族の言語について、音声、語彙、文法の基準を定めて規範化した。
- 2) 『現代漢語規範問題学術会議文件匯編』科学出版社、1956年 249ページ。
- 3) 西南方言、又稱「西南官話」。分佈在四川、雲南、貴州三省、湖北大部分地區(鄂東黃岡地區及東南咸寧地區除外)、河南西南部、湖南西北部及廣西北部。内部一致性很高。

(訳)

西南方言は「西南官話」ともいう。四川、雲南、貴州の三省、湖北の大部分の地区(鄂東の黄岡地区および東南の咸寧地区を除く)、河南西南部、湖南西北部、広西北部に分布する。内部の一致性が極めて高い。

江淮方言、又稱「下江官話」。分佈在江蘇、安徽兩省的長江以北、淮河以南地區(徐州、蚌埠一帶淮北話除外)、還有江蘇省江南鎮江以西、九江以東的沿江地帶、也說江淮方言。

(訳)

江淮方言は「下江官話」ともいう。江蘇省、安徽省の両省の長江以北、淮河以南の地区(徐州、蚌埠一帶の淮北話を除く)に分布する。外に江蘇省江南の鎮江以西、九江以東の長江沿岸地区も江淮方言を話す。

著作者：詹伯慧，校訂者：董忠司，瀬戸口勲訳『現代漢語方言』新学識文教出版中心 1991年）

- 4) 当時、広東語（粵方言のことで習慣上は広東語と呼ばれているが、これは広東省内すべての方言を指すのではなく、広州語を中心とする語を指す）が流行し、それが南方から北方へと広がりを見せたことをいう。ここでいう「粵語」とは広東方言のことで、広東省の大部分の地域（北部の梅県、潮州、汕頭、澄海等の地を除く）、香港・マカオ等で使用されている言語である。
- 5) 朝日中国文化学院『中国語基本語3000』三省堂 1998年。
- 6) 王占華『中国語学概論』駿河台出版社 2004年 174ページ。
- 7) 公益財団法人国際文化フォーラム『日本の高等学校における中国語教育の広がり』1999年 12-24ページ。
- 8) 全国高等学校中国語教育研究会『高校中国語教育のめやす 平成11年度版』1999年 12-20ページ 付録「言語材料：語彙篇」。
- 9) ①～⑥の例語は主に『中国語流行詞語』（中国人民大学出版社、2000年）と『中国新語流行語事典』（日中通信社、1999年）を参考にした。
- 10) ⑦～⑫の例語についても、主に前掲書をベースに整理した。
- 11) 言語学者趙元任が示した方法である。いわゆる五段階法のこと、声域を五つのレベルに分けて、声調を図示したのは趙元任が示したグラフが最初である。（平井勝利『教師のための中国語音声学』白帝社 2012年 58ページ）
- 12) 香坂順一編著『中国語轻声辞典』光生館 1989年 18ページ。
- 13) 『現代漢語詞典』は「普通話」の推進、漢語の規範化を促進するために、中国社会科学院言語研究所が総力を投入して編んだ辞書である。1978年に第1版が刊行され、その後、第2版、第3版と修訂をしながら、版を重ねて現在の第7版に至っている。2012年第6版では単語に品詞が付され、社会の経済発展とともに民間で流行した新語（流行語）も多数採用された。このことは、中国語学習者及び中国語研究者にとって、現代中国語への理解と便宜を提供している。（『現代漢語詞典』第6版の説明後に1978年第1版前言に始まり、第2版、第3版、第4版、第5版の説明部分を参考にした）

## 参考文献

- 1) 中国社会科学院言語研究所編『現代漢語詞典（第1版）』商務印書館 1978年。
- 2) 中国社会科学院言語研究所編『現代漢語詞典（増補本）』商務印書館 2002年。
- 3) 中国社会科学院言語研究所編『現代漢語詞典（第6版）』商務印書館 2012年。
- 4) 中国社会科学院言語研究所編『現代漢語詞典（第7版）』商務印書館 2016年。
- 5) 商務印書館／小学館 共同編集『中日辞典（第2版）』小学館 2003年。
- 6) 香坂順一編『中国語轻声辞典』光生館 1989年。（典拠：张洵如『北京话轻声词汇』中華書局 1957年）
- 7) 王占華『中国語学概論』駿河台出版社 2004年。
- 8) 欧阳因『中国流行新词语』中国人民大学出版社 2000年。
- 9) 宋考才・马欣华『北京语词词汇』北京語言学院出版社 1987年。
- 10) 張一帆・小島朋之（監修）『中国新語流行語事典』日中通信社 1999年。
- 11) 张世祿『普通话词汇』上海教育出版社 1983年。
- 12) 吴侃『中国語新語辞典』同学社 1990年。
- 13) 相原茂編『中国語学習ハンドブック 改訂版』大修館書店 2010年。
- 14) 詹伯慧著、樋口靖訳『現代漢語方言』光生館 1983年。  
同書には台湾版がある。（校訂者 董忠司 新学識文教出版中心 1991年）
- 15) 平井勝利『教師のための中国語音声学』白帝社 2012年。
- 16) 朝日中国文化学院『中国語基本語3000』三省堂 1998年。
- 17) 公益財団法人国際文化フォーラム『日本の高等学校における中国語教育の広がり』1999年。
- 18) 全国高等学校中国語教育研究会『高校中国語教育のめやす 平成11年度版』1999年。
- 19) 瀬戸口律子「普通話の轻声について——北京語との比較を中心に——」大東文化大学紀要人文科学 第16号 1978年。
- 20) 瀬戸口律子「普通話の轻声と北京語の轻声」中国語学 第225号 1978年。
- 21) 辻田正雄「轻声について」仏教大学文学部論集 第88号 2004年。